

ICTと英語の授業(2)

一言語活動

(ペア・ワーク)



杉本 薫 Sugimoto Kaoru (東京都立両国高等学校附属中学校)

①. それは当たり前のことですか？

最近、僕は研修会などで実践発表や指導方法について話す機会が増えている。たいていの場合、発表にICTを使う。具体的にはパソコンとプロジェクター、スピーカーである。理由は簡単で、伝える内容と方法を、時間を計算しながらコントロールできるからだ。さらに、実際に授業で使用している教材をそのまま提示できることもいい。ある程度まとまった話をするには必須と言える。自分の意図を分かりやすく伝えることができると判断している。

しかし、本当にねらったとおりの効果があるのかとなると、実は疑問もある。そのような研修会で、終了後にもう感想の中で、未だにビジュアルを使った発表そのものに終始するものが目立つからだ。曰く「ICTを使った発表だったので、イメージがつかみやすくてよく分かった」というものだ。もちろん、最近は「伝わったらしい」イメージの奥にある論点や内容そのものについての言葉も多くはなっているのだが、そこまでたどり着かないケースも未だにある。さらに唯一の質問が「あそこのパワーポイントはどうやって動いているのですか？」となると、何の研修会だったのか自分でも分からなくなる。

その度に、いつも僕の授業を受けている生徒はどうなのだろうかと不安がよぎる。もしかしたら学習の中身よりも、そのプレゼンテーションそのものに興味がいってしまうようなことがあるかもしれない。しかし、研修会に参加する教師と僕の授業を受ける生徒とは決定的に違いがあることを思い出して安心する。それは、生徒にとってICTを使った授業は当たり前になっていて、情報伝達の手段としてプレゼンテーションの技術や方法そのものを意識することなどあり得ない。

その生徒たちを対象に時々教育委員会からICT

使用状況調査が入る。あるクラスの1週間の授業でのICTの使用状況を調べるのだが、ここで教科による差が非常に大きい。特別教室を持っている教科はある程度の数字を出しているが、普通教室で使っているのは英語だけだ。僕の場合は道徳や学活などでも時々使う。英語授業では毎時間である。頻度としては100パーセント、使用時間の割合は平均してほぼ90パーセント程度になる。だから生徒にとっては「ICTで英語は当たり前の環境」である。実は、この調査には生徒への質問として「使った方が分かりやすいか」とか「もっと使ってほしいか」などという項目があるのだが、ここでも一応肯定的なデータが出ている。しかし、「当たり前の環境」の中では、そうでないことを想像して比べながら答えるしかないのだからあまり意味がない。まあ、使われていない他教科の授業との比較はできないこともないが、それもかなり難しい話である。生徒にとっては「なんとなく」という印象で答えるしかない。

ICTを使う授業について語るということは、きちんと追いつめれば、英語の授業のほとんどすべてについて語るということになる。珍しいことをとりあげるのではなく、当たり前の毎日の授業を考える、または「考え直す」ということなのだ。ICTを使った授業への評価は、「授業そのものの評価」であるということになる。その覚悟ができたときにやっとスタート地点に立ったということになる。

②. 言語活動(ペア・ワーク)の実践例

ペア・ワークの実践例を紹介する。元々次のようなワークシートを使って、口頭練習を積んでゲーム形式の言語活動を行っていたのだが、数年前から口頭練習時にパワーポイントを使ったスライド・ショーを使っている。飛躍的に活発な練習を引き出すことができることに気が付いたからだ。

Pairwork 20 & 30

Do you like math? / Do you study math every day?
(あなたは数学が好きですか、毎日勉強しますが。)

Stage 1		Questions & Answers		Stage 2	
Do you like math?	No, I don't.	Do you study math every day?	No, I don't.	Do you like math?	No, I don't.
Do you like Japanese?	Yes, I do.	Do you study history every day?	Yes, I do.	Do you like Japanese?	Yes, I do.
Do you like English, too?	Yes, I do.	Do you study English, too?	Yes, I do.	Do you like English, too?	Yes, I do.

math □□□
science □□□
history □□□
English □□□
geography □□□
Japanese □□□
music □□□
fine arts □□□

Date: _____
Your Friend: _____

YES Did you win? NO

geography

What's this?

history

What's this?

語彙が一通り言えるようになったら、次は疑問文を言う練習だ。イラストだけで、質問も返事もできるように練習させる。

これは中学1年生の6月，“Do you like / study ...?” の練習用である。身近な教科名を選択肢に使って pattern practice で口頭練習，最後に相手の選んだものを当てるゲーム形式の guess work を行う。

Do you like science?

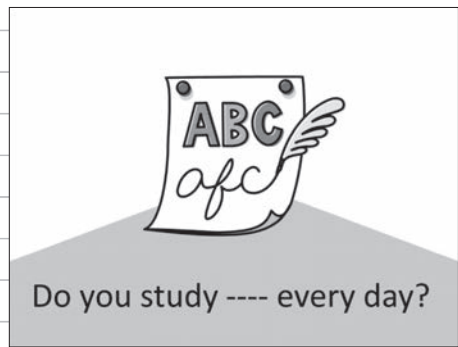
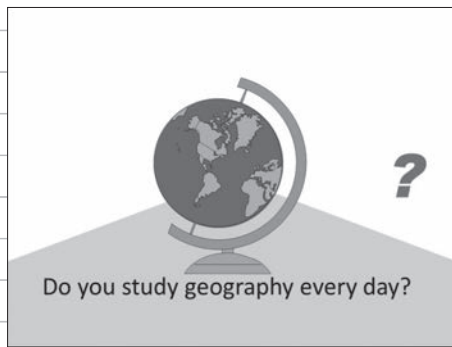
What's this?

まずは、語彙の提示と練習。イラストから教科名の語彙を引き出す。文字も見せるがこの練習段階では単なる選択肢のひとつで、スペリングを覚えることを要求しているわけではない。ほとんど聞いたことのあるものだし、中学校生活に慣れてきた生徒にとっては、当たり前のように身近な語彙である。

Yes, I do.

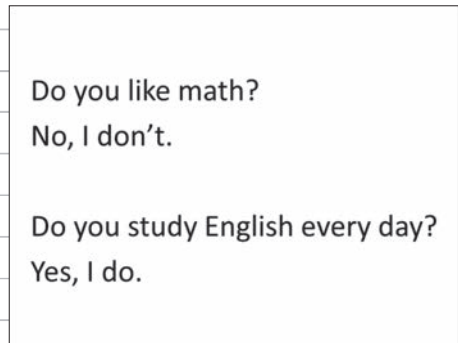
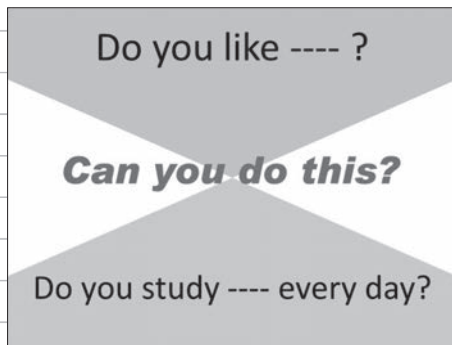
No, I don't.

“Do you like ...?” のパターンに続いて、同じ語彙を使い，“Do you study ...?” も練習できる。



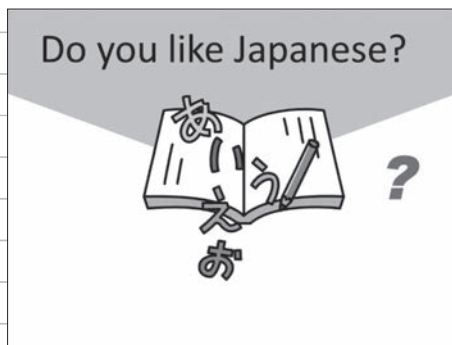
なお、一般動詞を使った言語活動では単にパターンを練習させることだけでなく、その表現が実際にコミュニケーション場面で将来使えるものであるべきだということにも留意したい。だから、ここでは疑問文としては長くなるが、“Do you study geography every day?”という習慣を扱う表現にしている。時制の理解で一番難しいのは「現在形」だ。

最後にもう一度今日の基本文型の口頭練習を行う。いよいよペアで guess work を行う。



ここで、スライド・ショーの機能をフルに使う。ランダムに語彙を表す画像を点滅させて、素早く英文を言わせる。生徒にとってはかなりのチャレンジで集中を余儀なくされる。ステップは生徒の状況に応じていろいろ設定できる。それぞれの文型ごとにランダムな提示を行うことも、両者取り混ぜることも可能だ。

スライドを使った語彙や文型の提示から口頭練習までで10分程度、その後のゲームで2分、途中で語彙や話題についての Oral Interaction を入れても15分の活動である。もちろん、スライドを提示している間は、生徒はしっかり顔を上げている。教師はその口元を常に確認できる。15分の活動なら毎時間繰り返しても無理はない。語彙をどんどん増やせるし、今回の内容は、後日「三単現」の導入があれば“Does he ...?”のようにもう一度使うこともできる。15分間の集中は、生徒にも達成感がある。もちろん、こちらは15分間の授業展開のプロデュースのために半日の準備が必要になる。これは慣れればもう少し短くなるし、蓄積して再利用もできる。



本稿では ICT を使った英語の指導は、授業全体の構成を考えること、言い換えれば、授業改善を目指す日常的な取り組みの文脈の中でなければ議論できないということと、毎時間積み重ねていくことが可能な言語活動を一緒に語った。次回は、この ICT 授業をさらに身近なものに引き寄せる可能性を秘めたデジタル教科書について述べる予定である。